



Title	[新刊紹介] ジョージ・リヒトハイム著『マルクシズム：歴史的・批判的研究』George Lichtheim; Marxism-An Historical and Critical Study, Routledge and Kegan Paul, London, 1st Pub., 1961, 2nd ed. (revised), 1964. p. XX+ 412.
Author(s)	久松, 俊一
Citation	関西大学経済論集, 18(6): 801-809
Issue Date	1969-02-20
URL	http://hdl.handle.net/10112/15164
Rights	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

ジョージ・リヒトハイム著『マルクシズム—歴史的・批判的研究』（久松） 801

リンはとくに金融資本による支配の問題に、アンダソンはとくに長期的な貴族的支配の問題に焦点をおいてのべているのである。なお、ペリー・アンダソンは『ニュー・レフト・レビュー』誌の編集長、トム・ナリンは同誌編集委員である。（河出書房、昭和43年9月、350ページ、750円）

—木村雄二郎—

ジョージ・リヒトハイム 著

『マルクシズム——歴史的・批判的研究』

George Lichtheim; *Marxism—An Historical and Critical Study*,
Routledge and Kegan Paul, London, 1st Pub., 1961, 2nd ed.
(revised), 1964. p. XX + 412.

1

著者リヒトハイムについては、ロンドン在住で英米のさまざまな雑誌への常連の寄稿家で、本書以後、1966年に“Marxism in Modern France”, 1967年に“The Concept of Ideology and other Essays”, を公刊したということ以外に詳らかにしない。がしかし、たとえばかれが「事がすんでのちにはじめてそれを真に理解することができるのであり、ミネルヴァの鳥は夕暮れになって飛び立つ、というヘーゲルの言葉は（少なくとも著者にとっては）真理である¹⁾」と書くとき、かれもまた、近年（とりわけスターリン批判以後）の「マルクス主義の石化²⁾」の確認の上に出てきた新しいマルクス主義研究者の流れに属す一人であることがわかる。かれらは、ファシズムとスターリン体制のなかで知識人としての矜持を保ち、その思想的立場の如何をこえて層としての知識人を形成してきた人々（たとえば、ルカーチ、コルシュ、プロッホ、ローゼンベルク、ボルケナウ、マンハイム、マルクーゼ、フロムといった人々の名前を思い浮かべられよう）の伝統に連なり³⁾、と同時に、もの・人間・世界を徹底的に対象化し相対化せんとする近代科学の方法と精神を継承している。すなわち、いわゆるネオ・マルクス主義にシンパシーを抱きながら、しかも実践とは分離した学問領域に自らの存在根拠をおき、あくまでマルクス主義をアカデミックな研究対象に据えようとする立場において、そのアプローチの仕方に相異はあっても、一貫しているといえよう。とりわけ、近年相次いでマルクス主義研究に大きく貢献してきた英米の学者がそうである。本書の書評のなかで、ピーター・デメッツが「マ

ルクス主義研究においても、多分地理的な分岐を無視すべきではあるまい」と言っていることも、あながちうがった見方と言い切れない点もある。「フランスでは、若き哲学研究家たちがマルクス主義と実存主義を調和させようとしており、西ドイツでは、若き新左翼知識人たちが、マルクス主義神話を再生させて自分たちの工業文明への怒りを表現している。そして豊かな洞察を産み出すに必要とされる健全な距離を保って、冷静に、マルクス主義を批判し理解しつづけることが、英米の学者に固有の責任となってしまったようだ⁴⁾」というかれの言葉は、少なくとも英米学者に関しては当たっているように思われる。こうした志向をもった学者グループの一つが、「はしがき」で触れられているように、ロンドン大学のカースティン、ハーバードのロシア研究センターのラベツ、ワトニックらのグループである⁵⁾。リヒトハイムの本著作の生まれる背景には、こうした知的交流と研究の集積があったと考えられる。マルクス主義思想と運動の詳細な個別的・特殊の研究の成果を踏まえ、それらの集積の上に本著作が成ったのである。

ところで、本書第一版公刊の翌1962年に、上述のラベツの編集で『修正主義——マルクス主義思想史論集——』が公刊されている⁶⁾。ここには、これまで述べてきたマルクス主義研究の方法と立場がもっとも典型的に現われている。修正主義はベルンシュタインがマルクス主義の教義のいくらかを再検討しようとしたところから始まったのであるが、現代では問題はより複雑になっており、それはたんに、社会民主主義的改良主義者や幻想を失なった若き共産主義者に適用されるだけでなく、既成の共産主義体制の指導者にも向けられる言葉となっているのである⁷⁾。だから、「マルクスの精神的相続者たちが、『我々は今や、みな修正主義者である』というような時点に達しているように思われる⁸⁾」と宣言される。ここには、マルクス主義における多元化現象が、正統と異端の区別を動揺させ、異端断罪の根拠を相対化させたという認識がある。その上に立って、マルクス—エルゲルス—カウツキー—レーニン—スターリン以外のマルクス主義者をすべて修正主義のなかにおしこめ、再評価するのであるが、こうした方法と立場を支える問題視角はどうかということこそが重要であろう。一言でいえば、それは、20世紀後半の世界が当面する課題——高度産業社会と官僚的国家体制——に対して、マルクス主義が有効な理論的武器となりうるかどうか、という視角である。それに答えるためには、一まず従来の評価の軸をすべて廃して、マルクス主義の歴史を全体として総括しなければならぬ。過去一世紀余にわたるマルクス主義の発展を、歴史のなかで徹底的に相対化し、現代世界の諸問題にとって積極的な意味をもつものとそうでないものとを識別するための準備作業とするものが、『修正主義』であったとすれば、リヒトハイムの『マルクシズム』もほとんど同

じ問題関心のなかから生まれでたものと言えよう⁹⁾。ではいったい、マルクス主義は現代世界の当面する諸問題にどのように応えるのか。フロムの編集した『社会主義ヒューマニズム』（1965年¹⁰⁾は、ヒューマニズムと平和を共通基盤として、少なくとも問題の所在と解決への手がかりを与えんとする試みの一つであったが、東欧、西欧、合衆国といった体制の枠をこえた思想的共同が、たとえ抽象的なレベルで現代の普遍的問題を解示したとしても、具体的な解決の方途をむしろ諦めてしまうことによってしかそれを解示できないという限界を持ったのである。「われらの時代は、とにかく西欧世界に関してだけいえば、^{ポスト・レボリューショナリー・エイジ}革命後の時代である¹¹⁾」とリヒトハイムが言うとき、そこには、マルクスの意味での革命を遙か彼方のユートピアへと押しやってしまう『社会主義ヒューマニズム』と同質の諦念が、あるいは革命そのものへの懐疑が、横たわっているのである。

以上、およそリヒトハイム『マルクシズム』の紹介には余分なことを述べてきたと考えられるかも知れない。だが決してそうではない。この数年間、きわめてすぐれた成果を挙げてきた欧米のマルクス主義研究の動向は、マルクス主義正統の権威崩壊の生みだした思想的混乱のなかで、来るべき世界を予測し先取しようとする産みの苦しみのアカデミズムへの反映なのであり、一つの時代が終わりつつあることの予感を表わしていたと言えるのであって、同じ時代を生きつつあるわれわれが、そこから得ることのできるものを確認し、またその限界を明らかにしておくことは決して無駄ではないはずである。

以下、その問題点をも含めて簡単に、本書の紹介をしたいと思う。

2

本節では、本書の全体をほぼ概観して、その特色を幾つか指摘しておこう。そのためにまず、次の目次を見られたい。

Preface

Note on Sources

Introduction: A Note on Methodology

I. The Heritage, 1789-1840

1. German Idealism
2. Philosophic Radicalism
3. Early Socialism

II. The Marxian Synthesis, 1840-1848

1. The Logic of History

2. The Critique of Society
 3. The Doctrine of Revolution
 - III. The Test of Reality, 1848-1871
 1. The German Question
 2. Nationalism and Democracy
 3. Socialism and the Labour Movement
 4. The First International
 5. The Commune
 6. The Parmanent Revolution
 - IV. The Theory of Bourgeois Society, 1850-1895
 1. The Victorian Watershed
 2. Historical Materialism
 3. Bourgeois Society
 4. Political Economy
 5. Marxian Economy
 - V. Marxian Socialism, 1871-1918
 1. General Character of the Period
 2. Marxism, Anarchism, Syndicalism
 3. Engels
 4. Dialectical Materialism
 5. Kautsky
 6. The Revisionists
 7. The Radicals
 8. Lenin
 - VI. The Dissolution of the Marxian System, 1918-1948
 1. War and Revolution
 2. State and Society
 3. Socialism and Class Conflict
 4. Beyond Marxism
- Conclusion

ここからも本書が包括的なものであることがわかるのだが、さらに「序論—方法論について」に8ページを割いていることが注目される。これに従って著者の方法を列挙すれば、①マルクス主義は一歴史現象と捉えられねばならない。従ってそれは、歴史的に規定されているが、しかしだからといって、その理論的意義を無視することはできない。いやむしろ、マルクス主義とは、一つの社会変化を理論的に反映すると同時に、政治的にそれに働きかけるものなのだから、歴史的側面か理論的側面かのどちらかに議論を限ることはできないのである。②マルクスにとって問題は、単なる理論問題なのではなかったが故に、かれが何を問題としたのか、そしてその解決の仕方が有効であったかどうかを判断しないで、諸問題を分析することはできない。だから、マルクス主義をまったく中立的に取扱おうとするのは誤まりである。③われわれは、マルクス主義を1789年から1917年に至るヨーロッパ史の独自の理解方法であると考え、また19世紀ヨーロッパの重層的社会に与えた産業主義の衝撃から生じた特殊な革命運動理論だと捉える。従って、本来的なマルクス主義は1917年までに限られるべきで、それ以後のマルクス＝レーニン主義は、マルクス主義的社会主義の解体とみなされる。

著者のこうした方法と立場が本論でどのように具体化されているだろうか。ここで簡単に一瞥し、その問題点を指摘しておこう。

まず著作全体の構成は、前半の三篇と後半の三篇がそれぞれトリアードを成しており、第三篇「現実による検証、1848—1871」が、両者の媒介項となっている。1848年に至るまでの初期マルクスの検討において、リヒトハイムに特徴的なのは、この時期をすべてフランス大革命の影響の枠内において考察していることであり、この枠内でのドイツの政治的・経済的後進性が、逆にフォイエルバッハの人間学とヘーゲル的な歴史の論理を挺子として、政治的解放ではなく人間の解放を理論化し、イギリスにおける歴史的想像力の欠如とフランスにおける経済理論への無知を克服し、両者を統一することを可能ならしめた、とする点である。従って、マルクスのフランス近代史研究がきわめて重視され、プロレタリアートは、ドイツ哲学の目的の実現者として、たんに社会学的カテゴリーではなくて、政治的カテゴリーとなっている。こうした後進性のギャップから構想された革命論は、ドイツの現実の非合理性への哲学的批判の所産として、きわめてラディカルなものとなる（第一、第二篇）。だが、48—71年の現実による検証のなかで、具体的にはドイツ民族問題、第一インターナショナルの指導、パリ・コミューンの経験のなかで、マルクスの革命論は修正され、のちの社会民主主義運動の理論へと変化した、と主張される。こうした著者の理解を裏付けるものとして分析されるのが、マルクスにおける「国民的階級」national class

の概念である。ブルジョア革命において、「ブルジョアジーが、社会の反動的成員に対して社会全体の利益を代表する階級、つまり国民的階級として機能したとすれば、いまやプロレタリアートが政治権力を目ざすということは、ブルジョアジーの社会進歩的な役割を自ら譲り受ける能力を持ち、社会を再組織するための指導を引き受けねばならないことを意味した」。マルクスの革命論のこうした内容の展開は、たしかに経済学批判としてのブルジョア社会把握の深化の成果であり、のちにグラムシがヘゲモニー論として継承したものであるが、著者がこの分析から直接にマルクスの「プロレタリア独裁」が修正されたと論ずるのは、きわめて説得力を欠くものと言わずにおれない¹²⁾。本書全体の構成のなかで、この第三篇に対応するのが第六篇「マルクス主義体系の分解、1918—1948」であるが、この両篇においては、いずれもマルクス主義の発展における決定的な転換が語られている。第三篇においては、「プロ独論」の修正、前衛概念の放棄、ブランキズムの清算が語られ、第六篇においては、レーニンによるマルクス主義の伝統からの背離、ブランキズムへの復帰、スターリニックの全体主義の発生が批判的に語られる。だがこうした著者のレーニン批判は、前期マルクスのラディカルな永久革命論を、特殊ドイツの後進性の所産と論断したところにすでにうかがうことができる。つまりマルクス主義のレーニニックの変形こそ、何よりもロシアの後進性に規定されたものであり、プロレタリアなきプロレタリア革命であり、従ってこの著者の視点からは、中国革命にいたってはおよそ理解を絶したものと映らざるをえない¹³⁾。こうした結果は、今世紀に登場した二大怪物、ファシズムとスターリニックという全体主義を批判しようとする著者のモチーフから生じたものであるが、ここに著者をも含めて英米のマルクス主義研究家の限界も示されているといえよう。

3

これまでにはほぼ本書の全体の枠組みとその問題性を見てきたのであるが、最後に、著者のマルクス主義理解の根幹をなす、第四篇「ブルジョア社会の理論、1850—1895」を簡単に紹介しておきたい。その解釈の強引さに問題は残るとしても、やはりユニークな解釈の一つであると考えられるからである。

いうまでもなく『資本論』こそがマルクスの最大の理論的成果であるが、著者はここでそれを正面から検討するわけではない。かれは、歴史的背景との関係において、さらにマルクス固有の歴史観とブルジョア社会批判との関係において、マルクス主義を特徴づけようとする。まず第一に、マルクス（およびエンゲルス）が、ヴィクトリア時代の興隆期ブルジョア自由主義に深く規定されていたこと。全ての事柄をイギリス中心に観ており、従

ってその鋭い資本主義批判にも拘らず、その体系はヴィクトリア時代の刻印を受けていること。第二に、マルクス理解の一つの鍵ともみなされている『経済学批判要綱』（57—58年）の分析に基づいて、ブルジョア社会の構造を発生史的・論理的に認識しうるための歴史理論として史的唯物論が成立したと、ヨーロッパ・ブルジョア社会の形成の秘密を中世封建制社会の存在に求めていること、さらに、資本主義の世界的性格を重視して、資本の文明開化的役割を指摘していること。そして最後に、こうした分析によって、マルクスにおけるブルジョア社会の一定の評価を指摘し、前節で見たような革命理論の転換の基礎付けとなったこと、が分析されるのである。

ここではその詳細な内容紹介は断念せざるをえなかったが、『要綱』を素材としてマルクス像を再構成しようとする研究の一つの先駆をなすものとして、そしてその解釈においてマルクスの西ヨーロッパ的性格を主張する一つの典型として、本書はいくつかの示唆を与えてくれるのである¹⁴⁾。

- 1) 本書, Introduction, XX.
- 2) 本書の書評 (Marxism Revisited, reviewed by Peter Demetz, "Problems of Communism", Vol. 10, No. 5, 1961 p. 37)。
- 3) 事実リヒトハイムは、「はしがき」の中で F. Borkenau の方法論からもっとも大きな影響を受けたことを記しており、またかれの Lukács 評価のきわめて高いことが、本文中の叙述からもうかがえる。cf. p. 367 ff.
- 4) Demetz, op. cit., p. 37.
- 5) 本書, Preface, VIII を参照。かれらの論文としては, F. Carsten, "The Origins of Prussia", Oxford, 1954., M. Watnick, George Lukács; An Intellectual Biography, "Soviet Survey", London, Nos. 24 and 25, 1958. があり, 後述の L. Labedz, ed., "Revisionism", London, 1962. において Carsten はローザ・ルクセンブルクを, Watnick はジェルジ・ルカーチを執筆している。
- 6) 前註参照。Labedz, ed., "Revisionism: Essays on the history of Marxist ideas", London, 1962. なおここでは, ベルンシュタイン, プレハーノフ, ローザ, トロツキー, プハーリン, ボグダーノフ, デボーリン, ルカーチ, プロツホ, バウアーなどと共に, 現代社会主義圏におけるチトーなどの新修正主義や, 資本主義諸国のニュー・レフトまでが取扱われており, 文字通り, レーニン, スターリン以外のあらゆる傾向のマルクス主義が並列されており, 欧米マルクス主義研究の方向が鮮やかに示されていると言えよう。
- 7) たとえば, チトーはソヴェト圏での「現代修正主義者」の刻印を押され, ソヴェト指導部はアルバニア共産党から修正主義者と呼ばれ, 毛沢東はモスクワでは「修正主

義的教条主義者」とされる、といった状況を考えてみればよい。

8) Labeledz, ed., op. cit., p. 9.

9) こうした問題関心に立ってすぐれた成果を残した近年の個別研究としては、たとえば、S. H. Baron, "*Rlekhanov: the father of Russian Marxism*", Stanford, 1963., Z. A. B. Zeman & W. B. Scharlau, "*The Merchant of Revolution*", London, 1965., J. P. Nettl, "*Rosa Luxemburg*", London, 1966. 少し年代を遡るが、P. Gay, "*The Dilemma of Democratic Socialism: Eduard Bernstein's Challenge to Marx*", New York, 1952. も加えることができよう。わが国での研究動向の概観は、山口和男, 「マルクス主義思想の継承と発展」, 『経済学史学会年報』第6号, Nov. 1968, によって与えられる。

10) E. Fromm, ed., "*Socialist Humanism, an international symposium*", New York, 1965. 邦訳, 城塚登監訳『社会主義ヒューマニズム』上・下, 紀伊国屋書房, 1967. 邦訳書「あとがき」にて城塚氏は, 本書に対するリヒトハイムの書評を紹介しておられるが, そこで見るかぎりにおいて, かれの態度は本著作と同じく「懐疑的」であるように思われる。

11) G. Lichtheim, Marx and His Critics, "*Problems of Communism*", Vol. 11, No. 4, 1962, p. 43.

12) 著者のように1870年以降, マルクスが従来革命論を根底から修正したとする場合, 75年の『ゴータ綱領批判』における「過渡期としてのプロレタリアートの革命的独裁」という命題は矛盾したものとならざるをえない。事実, 著者はこの問題をマルクスの混乱・矛盾として片付けてしまっているのである。

13) 著者には, 西欧対東欧(およびアジア), 先進国対後進国, という図式が固定されており, ここにレーニン評価の面的なるゆえんもあるように思われる。とくにレーニンの革命理論を後進性に規定された前衛主義, 少数革命論とする見解は, たんに著者に限らず(たとえば, S. Moore, *Three Tactics: The Background in Marx*, 1963, 邦訳『三つの戦術』城塚登訳, などをみよ), 欧米の研究者の一つの傾向である。だが念のために付け加えれば, 革命は少数集団によって惹きおこすことができないことを, レーニンほど深く確信していた人もいないのである。なおこの問題については, 本書の書評でダニエルズはほぼ著者の見解に組しているが(cf. R. V. Daniels, Book Review, "*The Russian Review*", Vol. 20 No. 4, 1961, pp. 361—363), フォイアーは著書のレーニン理解を批判し, さらにマルクス主義のもつ意味がますますアジアにおいて大きくなってきたことを指摘している(cf. L. S. Feuer, *Marxism as History*, "*Survey*", No. 41, 1962, pp. 183—185)。

14) 『要綱』*Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie* は, 1857—58年に『経済学批判』及び『資本論』の準備のために書かれた歴大な草稿だが, 著者はここでその全体的な分析を行なったわけではない。かれはその一部, とくに, "*Formen*

die der Kapitalistischen Produktion vorhergehen”として公刊されている部分を主として扱ったにすぎない。“*Grundrisse*”のさまざまな側面についての研究は、まだその端緒についたにすぎない。なお“**Formen**”の英訳版“*Pre-Capitalist Economic Formations*”（1964）への序文の中で、E. J. Hobsbawmは“*Grundrisse*”公刊の歴史を概観し、またマルクスにおける“*Formen*”の位置付けを詳細に論じているので参照されたい。その中でかれは、本書にも言及しているが、原始共同体についてのマルクスの見解について、リヒトハイムと意見を異にしているかに見受けられる。筆者もHobsbawmと同じく、リヒトハイムがマルクスのロシアへの関心、さらにアジアについての時論をほとんど無視している点に、大きな不満をおぼえるのである。

—久松俊—